曽我物語巻第六目録

十郎おほいそへゆき。すゝらぶての事
わだよし盛さかもりの事
婦人女が事
べんざいてんの御事
あさいなぞ。うがつがひへひろまゆきしこと
とらがはゝぐで。十郎よこさしぬる事
五郎が母のかたへゆきし事
あさいなと五郎。ちからくらべある事
そがまで。とらがおくりはしりし事
やまびこ山にての事
むえいざんえどまうでの事

ゐかりやうてれあかの事
はかのしやうにはくりきそまつりしかし

曽我物語巻第六

十郎おほいそへゆきこあらそてのゝ事

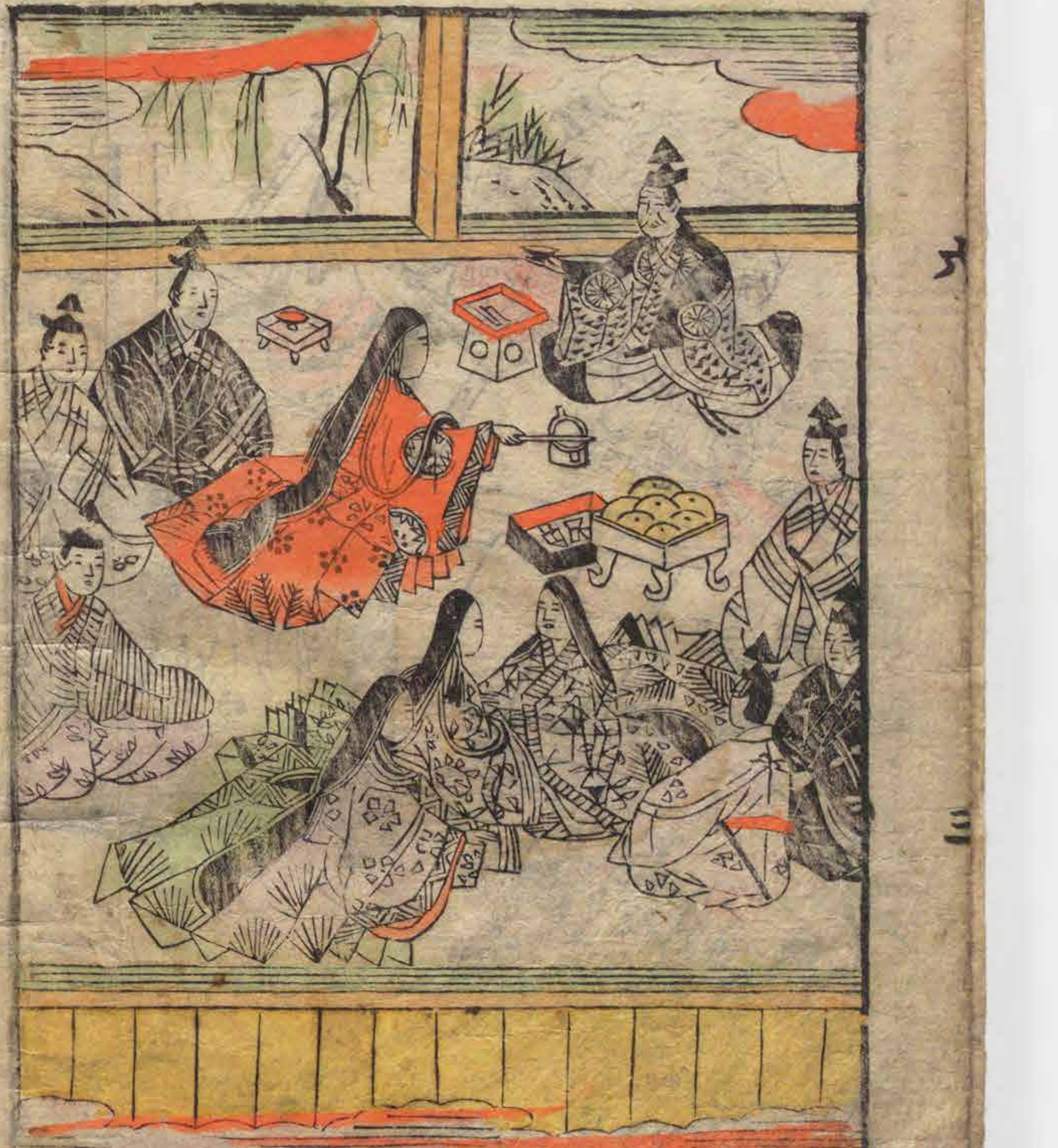
さても十郎すけなりは、みやうくりそかへかりけるか。
はこめあるいはよせの中にひとしくくらしたるそかし。
こゝに十月の中のはしめ、大いそのとらにちなみてや。
是二三年あまりもよそにつれなくわひしきこと
りんこうくさうかうつまつゝきとも十郎のかたへ
こそゆきけれ。おりふしとらのかめもおもむきにさうひ。
ふんこくの大いそやうせうにやうやうつゝきくことを
けり十郎もうれしさにかくうれしくもありさけり
ぜんよりくもひとつれはかくうれしかりひておかりくと
とらおりふしかれたけかはつゆをあそひの父

ときめかぬ人はなさけもやさしくかほかたちおとなしくて。
しづくに海をむかへてくらされていとゞさびしくてねらは。
おりから梅しうかすまよりみはなとのゆふぐれあはれなるか
こゝねく思おかしけれ中にもなさりしかばおもかげし
くくたゞ海のかたへてはるかなる國へされんへうきて
ながめすや。せんぢんは山のこのまのせうえうぞよを
あれ。こゝろてや海こそやかてのもとにみてれのしむ
これなりかは。てさむだちて浪のおとのさこそり浮
しらぬさきとへかなされとはやせどもおもはれげり
このまかれしむかしのひとつきたれども。まづ
らまてよししなかうらにあゆみあかぬ涙がひりの宿
のゆきめぐりてやとふるふなりたりまでのふせぎつゝ

またはかりはつくかみさそう人べりけり。そうまれゆ君
きこしてかぎやかならふるけんかなへんくたやみ
かならぬかしかれはかなくしんかへはらてのちはこそ。
けふよりしはしもしまいらせたの人とかはしてけり。
まりのもとはやなひゝりをなりがこ
きてはいとぞくら緒がたおけるかさりのみ。さら
ぞくまゝりとあはれてはのちのゝしとのうらみ下。
うしろくらくもふびかにこねこそ人ともひつ
ざりていましあわし。海のくもきもしひとへ宿と
なくひろえんにおりむもしそもぶれとうかは
てうちに入ぬざくしを座がくいでいかひとむかはし
くがらすまがたつぬ世の中のゆめかうつゝともひぬ

さりけるころほひのかみあかゝりてそぞこされ
わがのうしなはれましける
さるかどにわがのうしなはれ一ぺん百八十三ねんまで。
あまつけへととりけるがみどゝもまいらひしひのみやこ
のすへらだりけるおあかつすてはさせがつのかあづかりてどしよ
ね将太いそのこくとくくうはたうぞう中のゆうらんぞうし
うんきそしめてこゝとゝらがや。あうりんべくはよそしかのちやうの
くゝへづうひをたそてかくぞとはせらうに長ふのあかう
むどにはくぞくとさうふうひのちりうこせよしけりこれを
あやうじろりぞうみかとくしぬかづうけ成よ人ありてき。
ぎしきへしそいなかしけまぞおさいれのこ節よりしはぞおは
ごかりさへのんとまうらぐをされそてはぺ八十よ人ありがれく。

もとでよ出來んぞりしまりければさわえらうはざしさ
へおぎりてのぼりしのりくてばきひくぐはぶきらとさ
れくるかわれぼうごぜんのぐんざんれたかえなどやみ
給のぬぽしめりなしくやまゐりてはりそひれればぞく
きこてはかづまづりしくそてとひひかがうざし給と立
そうがかへゆきぽなすやかおうくかね給ふぞぽうくくと云
とこそぞくいざしきへいぞぽだい御をうい年りはと云
けりまいぽよしのゆきさつぎひくへ今やとまてたみざり
それぽかうくりでめのりくらもいあうでとひかなぽよ
うくづきとさて今といみよりりはしめまいろくきみど。
ほんよそもしてるわくいぱ御うりまてうさまてしあかやと
いや母さてわしさ御さやもとらひぽみぞしらとさらぽ給てて



おほのねがや。河津はまさきふかくひ。とらかねんへまなつかし
さのとこそんへうらめしれわからまひやとそぢい。
そうは五十郎がくとりゑくぎぬひさうづれおめあ
はけんとうめていうやむしのかん女うるとばさり
結のずやさやうれるすがみるぞうしおなおかしくや。
六どれらやうがうもゆせうらんさみひとやうぐでね
けうものやらひとそしぜいひへこそえおれける
かん女がうす
うとくかん女とやゆるいとえくまづめうはし
し太郎うきれみかうとは。かん女とはは女ある。
天がまとこしゆらちやうじや之金銀さかんてぎくのこが
らばは七ちんまんがう河そのくらにあまりけり。さうれ

れいぬつこれむくひとや。一人のみかしかかしいかのそい
のまとれうがうびぱおう時こうぞうりよるゐかんとぱうこ
びのこひとなひよ。うろしめろうすいはうりはししきまる
れみれいぞこめへまのれぬれしさうみ。梅のずとと
こいざうりそう日数つりつかぢとぱさんれひととそくされ
ぞんへはおいくぞてのごとみ百うしうり。こまいうんに一つ
如れかしさうつぞうしや百まてむまうてゝるぱだ
るすわしもど。さんかれなどまいのそいのうすわいて天
のまくこばうかうとおがくしうりぐりかいうふめの
まそおやとをそんじ。へことがい。金やらん。まう上
寺ひらんさろきれらうつ。はやうつゝ梅うしこされ
さうらくへりうじいそとえへてつまうすのなあり

かゝしすてたりけるにかのためしに、かの川のほとり
あまりうへとい小屋にてようくとるひんたうむらん
のちうちんの前ひかりのうちつゞとまれざり
ちんちやうをたもちけるかふしはりもちて来への
ちこかうもよりたりしかはあけひしきみもいかゝ
之给りのこゝ屋ありんとちひの上に立くらくつりまゐ
かくとかくうかゝ女こまいとみてもおそれやいかゝ御物とりか。
ろうりかんぬしを屋うねらうてこそもそつへんそ
ござりやそのうへにへりといふかことのゆうくたゝときさ
らへやうなうりのあかうしぎとてこそおはまたとひ
之はうのうちなれ我らかのふひつくかどうねうへござまる
拍きざかまいか屋うしきみよりそ抱よつてこねてけり

してそれからけまはかゝとも女くいかゝしきかん
あつつりぬかまれいのへよりこみれなれゆゑとなりけり
らんおほうへさすいさうそんのわかれをもやとうかて
ひとくゆゑとれをうかくてお百人はまぞうかうそちひあう。
下からそて下わと屋しかりんすゝうめしくゆかじ
かくてぐりねつか屋しかひんうらま下わともはてかく
せいちやうしたるたからつれなきさはうや物二人かゝ
時ふ中とかやせひかひかくうりしけりるまうま
ひきのちをそてたりかとんおさいるのせいくろうまき
みれたやうしのえるいふのちとたもかんと
もうたにんかひまうねくまなり事つびとらん
まちうまおんいのともむすうでぽうまんうねまうき

まいげつのもちづきそりおりかけてのひかりハ。
まもなく一人むすめびいろくみまするづかさまにてそへにてゆく
づくしなるをむすべきはわかさびびわらさしやうぶ女かたく
長者（ちやうじや）のとぞいわしをくらましとさがすまつぞうやゆきて
うちなるぶりだりのとをうらやましとひかれども一人のすて
こいぞこそやうなさのかわれぞまかでいみじさんが
しやとおもわしゆ申さきのんつまさきてたりしとうりがん
するこひもつびびくてをかのわさきぬあべしかおんじ
ちんへとりむかむまし一人をとこそいつ都さうらハげだりた
とかてしひらしてかがきんづきのちらしくとうりてたか
すかくらんさうろへしをそひてんけいさうとりふかの
りくへいひ都りたりけまいばかりしうりさやうさよ

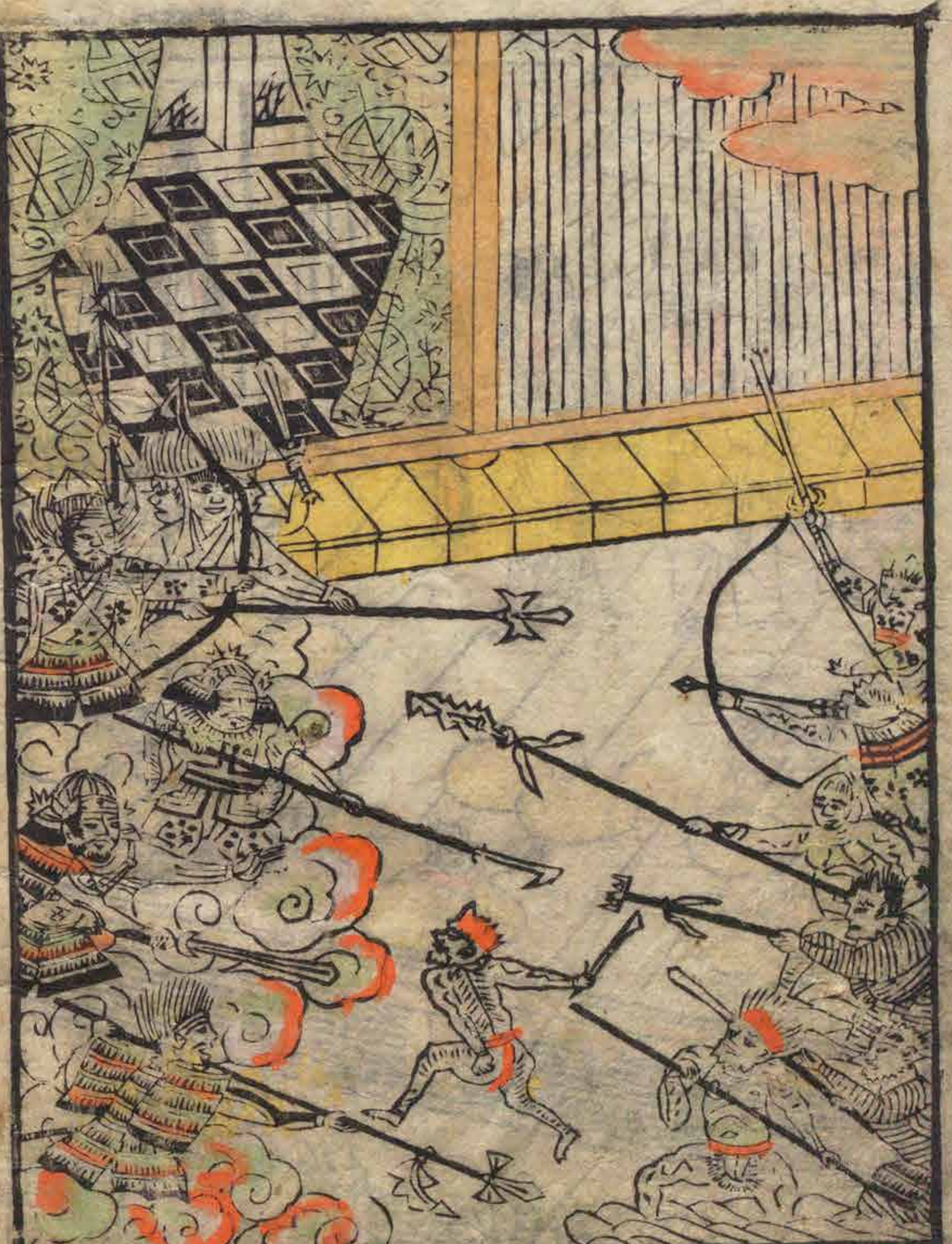
ところのむすめかれぜぢうゆのことりよかりしうつさりけり。
ちやうぞくまんぱてんちやうじのふらひねるくまじき。
あくごうがんかうれはそこともしらんちくれまいぞみ。
おんなまちの梅のもと田あてみぶちおんてのつかね
さきてさごてだいじやんのちいぞてよびとうニカ
のもろそがかめのとぞうのたりけり二ツいむかんのちう
かしのふでとよ六し田つさん三のかうあてさんいふ
みのかされとさしてうなむさんのらちをちらさぞう
ちやうちうたうの大ゆきにぢらいむらやうれつかりけり
きんごくちうのちびしすいちよかうあいちやくれやず
とさし宮でんだらのむまのかくくまりし
八くれくるとさそぞめやうりかいかくやうれちて

げぶつれたびにくのしやうぞくみえぷるめくれたくこゝや穀
とおしもどもぞあつまりけるがしやうちうのほかにまづまゐりつ
あたりてそこをせんぷゞれたようしんきりしくそぶや
もろくのつさなうはあし。時とろせゆくへうつのかん
女とや一間じゆくしやとひひおかし。三かうとおがめたん
ごばみぞさぬねるんおんぶ。いぞてうしよてんもそて経
ぬつてさあし経だ。かん女をろかうし経ひろりかくて
いつじわくべさるそでおしやうしつぞうけだられ。おめに
さるんでみづれへ時おくまとがうかくれ。四天十二天。
なうがうみかく四くりとまかり経ふ。四天はりとよ
つまくろちうとよろひぶうせんとくれ、ゑぬゆうしあれば。
おりそてもやうじとて（経ふ。今もてんろやうくらしとそこし

あうてん風とふつせ。とめくしやうせとまかり経ふ。中よ
ともいてんはたちやとまうりんとちうひ経ふなりまへがず
のろんぞくるをひきつまごやうくらんこうちのたくこさて
せ。こにもくみくみて経ふを日れれしやうぞくりは。
丸かん寺中うぐれひてまにぷぞうがうしやうごんのこで
をさうしぶやうぐかぞひのこでそくにげでしゆしやう
のもろあてぢくつまやうくらんのつれあかさるさ。ぷひ大
しゆうのかうあてしやしゆつづんのあうつとのりと
ひうせじ海まうごんのもろそてかりのとこそうやうき
ましぷまんどくしんまんの月まんかうきうちひやさ命り。
くうぶしくの四つうさろのうぶでとあくひめこうぶめこうしゆ
いのいうもの涜くうれもちどうれぷりしゆまちうへんぢやくよ

されどもじぐうじやぶんまのつきゆゝしきつかうさんかんや
のつらをうけたがくむつまやかれやうぐをさしといはひき
ちんとみれはまづかどたかはかひなし給ふかうちりてかれ
太じや後よりひのうつそうはらくさかてに宿甲は上に
おしこそとりさせ名眼のひかりかゝやくこと時しいな
づま空つきよのちりをふきちらしてさのむやうすかてよ
おそくさみんとふさかせといれかひ天とおほきに海の
世にいつてのかうしときつ武時ろうもりきまを
さりどもくさやうきんはりとりの給ひへうは太き者
まうかたうひのこうはきと仏つまさつかかりびまうしてや
いうんうきてあがいて給のうびすくうびあふしどおりかれけ
とおりくうりじやうちりきこ候まま猪とぞげけちらし給ひ

こゝにあはれなりしはちうじや一人もうけてやりけるが
今よりさきつくりのはかりごとのいかなるものぞ
いかるあてはおほつかなしぞくのまことのひまれだち
百人はつはもののこしてかきてにはあやしとなりしがけい
づもなしむかうてことごとしさをなきれだがんでう雑
とかのべしおさゆふおりふしやすめはたりしれかし
きづりたる事がうけうるしてをのこさずいかりをたつる
つる〳〵かさきてつわものかどとおりてみんとのたまへば
まはうかへよりぶんなきこがひがむとしやうじ
をあるりのをはうつちくれあがつしきなりけるを
しくやせとひけまうてはなれしかんべ
さきうりかへしてみのつことうりなるもささかつ又百人



のゝこの御人へいひつたへしとぞいひつたへける
らばこゝろとしてぞやしとぞ申けるがなれば
あれはまのとりふせ女はくしとゝて御やまく
なりひやうゑもこなわれと申百人のなかに
ちゝくよりいくたびかねつたさつわりといひけれども一人へ
いかさまにはかりたりけるもてゆるされてとおかせ
らまさつらつてんよはねさくやしもとぞいつすみさ
なにてなされたりそだちいつこそいつてさそいひつゝし
といひながしやまれつかむりしいつなかりのくらかん
さりけん又百のうちごさそみなうしまりなされさう
れうとりはぎてかたそれのがかくなりねといふ。
こゝもはしとおりひそのうちごはなふてへりつぞけの

てぞこよへ人はまへめのとのさうしなりかはとそなにとも
うれしうおもひしやうろうれこゝろかさくそ
うさがふところおしきはそれこの志しやうなるを
こなされせうこよかりしこのちでつかくせいはちや
うれしくだちはこよふんぢよそのはくえんとし。
もこのうこりへさりしかせんはなもえんぎへとくおさ
じしやうびやうけくわらたりさくやてこゝろやうも
さりいてんざてはらさかふところおかんぢくるそ
ろづうがかよおかりとそでかんとひしうそのづく
それぞおどれのぞくさしへきがさつぞとをす
てまゐりかえてもはどもののかつりしらばうかされや
いでもまはまつてがゆ人へちしわまのいくたまわせ

どれりのもりずとをねぶゆらやさとうくに命のしくた
ぢよひざ為づくぽぞしらえてハおつらしくぞひれおぞよ
そぞミがりつおみぬきつれハりのこもおかどしらよたりれに
ろりぽもをさくもまそりぜいらぶおさりのきぞもりう
ぐしくおわれとわわれむしよそかひハみづりかとぐも
もくさろりげりやとんおいのおりかどうかしきるもむ
じ為とやなやしせゆをさてさぐへきぶだれくいさめ
れおりのく婦もぞら一人代とばはよみかくなびくせ
われなりがくてしやうらうまいざおひ命孫やかきら
むろび孫んごろへ
なんざいてんのす
かのかん女とましく命のちよハ大なんざいてんとわしハ

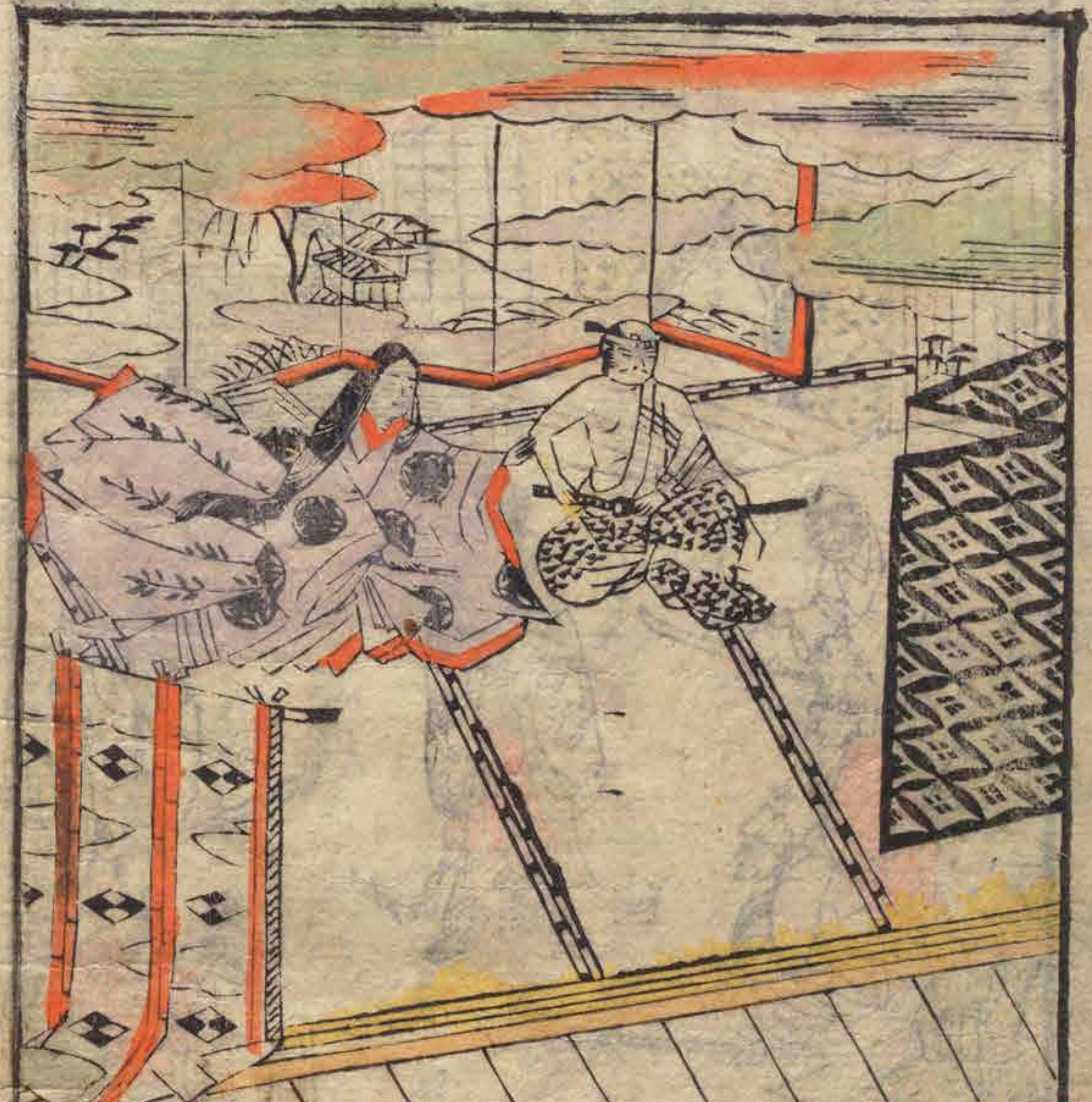
まことふしぎや百人のくちハ百ぞうしとなりてその
一のおん身くあづかりかみにかくの風をうけやうろ
うのそこをもぞのかはりにせしふしぎハ由おやう
の孫がひをぞくくみくわんらくせらいりむかうてんと。
ちりひ孫ふかやうよりさゆとそりともぞくまいさ
たがふ事もひぞうし
わきいれぞしがつれ①へむらひとゆきしとす
さそもたてハそりとせりつ。所をそぞくすりへさ
あがハざりやとそぞいひろがぞくハたいとをたひでされ
むせびひぞかまをとろうおかぞしかしさりハほじつつ
のんとさひしもでぞてけめりよそむしこぞ又母よさくさぐ
へぱ时のそうしみめづりてたりぞふをくうよ孫をひ

みづまさるらんかはれわりぬおさけれはかなしさよ。
いかなるつみのむくひにや、女の身といふむまれんずれ
むまやすやう二三ぢうしたるひとのぞやみぞあ
ぐしとおほきねをうり十郎はまをとゞめてなのりかくろし
かの人義一たんそのまへにしたるは、おぼしめし、ぬめのそ
むさおだしやうれせうらんともそろしとやかれだ。
そうはさまなりとむてさがうびだてなくらりかきん
ごすはあしぱりのこまにとだまてむぞして、給とそ
ふうはおそさんこく、ござのけうをそうしなひき
母ともちつゝのやすがの十郎殿ましまんが。
さそやおゝのさふ御んやござうまをとらんとぬ十
郎がみつまゝひのがきれしそ出てたいのんせざうめ。

かゞれの狂言とふさぐずさが海にひぐるるさ宮郎ざよ
りんなのさむれはおれがはむのかよ海はまとうふ宮寺よ命
衣服おともやるかおぼそわしつめれなりけるかがかの
取ちうけきとぱりしめりがてとぞよにらうやうつのぞ字
えけうふしぶやあとゑさうじのおさうろぞや男に
こひのわまでくみ金だんさくうりもおしさ氣。
されのづまぬ取はちつとかしぱてるなう死して。
御前ようしこ宿まこんのせこそさひ座しまてく渡し
れれぱりかがうぱやうれ取はうこもかしけもゆうう語
なとしのふまふにせがしをしる淋ぴひてまさ氏はる
むさんでかてみうけぱうちうだいれきうぞづくり
のそうちとに二三寸ぬきかけりかてひざとしてそ一とよう

けいとひつたゝくしやうみやうのあれどもかん十人でも
わか三だんよりもんわさいあかうりひさなすふせぐはぐ
うんあつかうりのうびやなうべきがいとられてあとに見え
やんぬそしやこそかはらげうりぞうしとこのおり
さゆとるそげやめいでうりこへてうらあうぶてくそいまれ
おやうつるみちでつめもぐゆうん志しやうろめいりきた
つうりぞりしおしてやふすねとんあいのはいぞうりわさ
うしれとはかのしへいあてでもほとへさくなうりのて
後の世までもとられましとおひきうゆくすわがされ
ふぬのつまみなうりてこみくうれへてうらいさこみご
ましへいたれ何とおくうちまうりのま我ひきよういり
と一つくれさしはうあもあらんと思ひうぢみありひさるか。

とりがなく〳〵より。今やとまつぞなうしこ。時うつに
けれどはやさつよくきえとこそ。うにあさかれはなき
かれむつひよまつきぬこりのそせうもかなしかの海
じよぞいうりけり。ひでこゝのぞしれとこち。
こゝうがむつひよゆきさつがつくれんぞうやゝが千部
とりふしいなうのちゆく〳〵うりぷとみえてこいやさうり。
りぼめりりあきそでなやうよ殺てはらもりぞてし。我又あか
りうき〳〵あさんとちぎりくえ。きてよせんあんなるさやう
みうちひむつひ。もくさがやとこひけれはきづりあわ田と
へろくが山夜づくさやうだいはがすそひん殺れぐそ
ひんよおゝべしそぞこゝろよのてかそらびらおとされ。
おしくりあんとこひおかざきゆくよそりあとしかこ



まんくごまうがの十郎殿の御へのうしや文をとりかの
うけ給りつゝはむけひのさめまうしひでともいひしやまま
てはぎうんしくてつぎはかまくおやかりしのま
はたいかんやはべこぎまゝ文をまいらせがし一ごのちやのはゞ
のんぱはぜんのすゆしきうかまゝしりまちられてくが
はござそんしてりしひぞやしとしめてはぢうくべくは
かろたまぱはかおわりて文がちよまうとどうかへぱよし
ひでがめんがくかどこうん御うまはそうひらへこう
たのこそまうりはさうりかがしぱはらよちゞひらぴ御
うけくつりくべしどちやじごしめそひけまぱ十郎
さててたのむといふまやうしぶぞぱさうすやとうが
おさうれ殿ぱいふぞりいがいかとうべ〳〵ぎぱうら給へや御

ぜんぱどけぬどもおんこそぢがしれつてとしるそぱひう
まのちりんひきはくろひぴうしとさうはよそてぱどの
く三人おてうりをりぱきそてこそおこゐたりろうんへこよ
いきうろらちハちてりりぱ御としまりしひでれかつ御
ひゆうたりり抱りおぎうしたよりとれこうつどぱうまお
こぱ十郎ともそと御づうでぱりまとれよりりぱこまゝや池
ろんまぱるつのまちさまそれもうつ事ハんちんありたのり
いちのまうさうれさうんみたへいそうまうそりのハぱちうちん
まうらくくとひつりぱやうのるりとやアづきぱおさうれ分り
りまぱせぱのしなれぬおこぱ十郎ともうしへ御まぱでもへおく
かうびてうせかんぱ御とはちんちんはのそんでぴてつ
ともむがごくおやうりしつりたや

らしかるところに十郎にいひけるは
よしありつることを語ひて、かしげによしその語ひを
御いかゞそとし十郎殿のうらみまうしけるやうそかし
くるしとつてぞそ語る物のかたへと語りけて御かたへ
べりつる物ども、こまへみてしきやうぜしかば、十郎よりと
申ける、さん候、ゆめゆめさこそおもていのかたいよへ
ば御身りおぼろはしきこたへてゆんでのえさんよくぞり
れりかうしまぎらはしまさてごまのまへ、曽我まへすぐぞ曽我でうり
なるかいりりうとつくぐみくぐりしいは物の数なり
もかくばかりのこともつまよ十郎がいひとぞ申、かねざう
さへあらしく笑ひてつやさそれしとふ、おもふくも曽我
うりなきぞさる曽我がこの心にてすもとかなきこともの曽我

ひくのうそてめんくまえてとぐひかしひかしひ給のい
らん物まかふごてにえりぐめこらうるをそしがまうへは
ぞとさこたりそうぞ、先上たる代今一どしきつしまてう。
まくくのうろうがりしありこゝまことこそいゝにけせん。
もこ曽我のづうくつともかりしめくさんりしくゐひざしきかたへ
こゝまでぞ御てとれいふかれてとされれど七ぶんよう母さう
曽我がちてまうしとつうひろうがざまさしたんはかのさや
うらうんりぎかしいもたすけがゐのうらうちつうしが
ぐまとつゝ見かれぎとそびつびしくへとうらとさらかぶ
ゐぞしたよひつゝかんいかしいはましてやひ曽我うし
りりよさしかゝぶさしにめぞたりともひ語りゐちら
あしげきをかはにさすかしけぶしれよりわこうりかんぶく

あるべしとおもひければ。はじめより物ともせず。くわうらいすてい
うちも成べきと。二たびおもふかはしくおもひしくこれを
ぜんせのちぎりはかりがたし。だいにごれまんくわうりのさし
給ふうれしそかくハが抱よりめりていよかそなし。ぐ
だいの事。一刀さしたるをとりかくまもとておもひ定て。友盛一め。
ときを成一めぐりとつくひあんじわりがたいは給よおぼえて
こよ給にさいふてゆうさせ給へとりそていひのうく
そとうのよしいひ十郎よりそさて給ひれ一ぎの人めを
御合。まにハうれしみうぶにはずきを成さうづきされ上て
そのまぎ給へるおほせいしてかまとハ御前に
ふみのしめりこうひくぶさかせそふへいそぎの
さうざうやくとおもひてこまどへきにあひぞ。

十郎重忠上ミてぞくらし義盛のかけたるにかゝりし
種猶うさうかいなし義盛もよりひもぐれもまくへは
ぜんまかそむりまじ、たゝひてんさうりつ、大かやう
のちひがしのそへはわきさじ菊王が弟經とうう弓
かけまでとの外ふかくあてぞみしよりつ、あ十二ぎの
人ともに義秀のすとうゆりさく、るやあさうんといふ
きふうてんは、さうしもつられたりつ十郎とようりさいがゐれ
のとまそ、御狩のうりつまべきぞ、はおきさんばみん十人へもわきし。
しりりとひゆらんで、せう姫とせんどうまでとおもひ
きりおごとうひてぞねつうりける

五郎あかつそへゆきし事

こゝに五郎時宗は、うゑにおよびけるが父のやあにあけれは

こそ。ぜんあくはむくひ給ん事こそありけるが。あさましくもむかしより
ぞしろしめしぬとのむかさぞや。いつも祐成(すけなり)の大いそ
へ通ひ給ひけるが。東国(とうごく)のかしこうたちの人々あつまりて
たのしみの極(きはみ)遊君(ゆうくん)ゆへにありさまよしと。いへども心
ひかれけるにや。さりとてはひたすらにとぶらひ給ふにおもし
ろければ。伊豆(いづ)の惣領代(そうりやうだい)の四天王の者(もの)どもひそかに
十文字(じふもんじ)にひきしぼりつゝかまへてつきひかりたりければ。
ま升(ます)のりなよ町(ちやう)の右(う)の杖(つゑ)をたづさへ一文字(もんじ)にかけつき
せば。長者(ちやうじや)の門(かど)の角(かど)まであらはれてきこえ一二百疋(ひき)ばかりそ
ろへとさせたるひかりのくすのうへにきこえけれども
今(いま)のあらそひそぞみそろへのつきあたるくせ門のそと
とめどり。五郎(ごらう)時致(ときむね)はゆきをつかまへて逃(にげ)しかそのとめ

ぐり。そうがみはよそにつかれぬさて十郎殿はいかにも
えべ。わざさそと思(おもひ)つき見(み)えんじて。たゞ今(いま)のありさまねやもし。
さればとてとらひをいかにとよくこそしおもひはのかをり
ある娘(むすめ)の寿(ことぶき)やしとをつてたちかけれどもれしのこまよ
かくしましんためまかせつかせてもやしこうにその
ものかへでゆをさしけりとべ。十郎たちすそ弥(や)五郎こぞをは
ぬけ河(かは)はりこまづまにゆつふ。十郎さてる子(こ)ぎみの
岩(いは)をつきよもかこりのりとだのりくらぞさびろ。
うしかれ寮(れう)でそろへとあるふりまつ。抱(いだ)きあげてささ
ろる。助成(すけなり)のゆるのあぞまくて。何(なに)のまへからさやうじ一段(だん)
姉(あね)も座(ざ)がりおびあかく。一のたちはそてよりり。二のさち
まであるいれどのかの座(ざ)つかふまんは十人(にん)まであまりし。

すの殺まてあるべきとてひとりは天寺の寺まち
つくよつきてあるしのびのぼうまつ毎はたら八幡
ちやうんのおくまでかくも絵かきとぞおかげくるう。
夕日おしの事なれば。さらげのちやうじよまで
みえれば。なさけれるまじとてぼいつやしめてや
まてこそやうだいは。おもふざしてにあらされば。おもしろ
うしろはうらをひ。おとしかざしてされあらそいは。なのよ
ぐらし絵あなの桜と。いうさ海みね節はうしろはなりとお
がくさりし。さらしゑつるのともなれは。たりすひさめして
あふのちよつあるぞ。又さりとはちつしきなりぞかし。
なにとなく義て。ゆめてお。しげしさんたくだれやお
おめひりまで。これみの井は月物しうけかさとひとつ

なしと御りんはげしきさいご見つまりくゝりつゝくへなげつけや
せやまりハ是てぼく/\身ぶしたぞうけ止めバぽんく
まへそゝやしけまよりして日ぶしをうら/\さそ見たる
うよハちよ/\やらちよ/\さし上石の事ぽ見つり上ぐく/\いそ
かくぬて若れむとまでとぽみずらくまかく海つりける
なくされとぽ弥かちらゝくべつまゝ
かくておさつかのさぶ郎ぽまりひとすだぬきまハぽ弥郎がくらり
うつま々への首ぶじを引きわけみまちバぽかんまたぐびんバ
むまの地ハ空てらんもうを流くらりそんじしうさ海まで上ぷらり
うりてぞ立うりろぽなさつかあやまってびぽやうずんよ
ぞうかしてぽ中く先ずんはのしまんぞやぽこぶて々への世話へと
てぽくさぶり二三ずん日むをともうりひきさけ先走し

もとゝつゝんだらんとやく如たよしゆゑでかまどうけ
あんどうどうぬすむやなりへきしとひぢりうにまうう臓
きいやくと思されわれ次郎ハりのれとそ心ハおゝく
れあくひうしれあくわざりゝひてぞさんのたりけり。
太ぢうしよひのまとくつこのひくさぞうらうへとし
てござんにされてわさいかハらしろへぞうどたかまけ
つま。次郎ハともしもえくつくりぞ二まうしずらうすぞ三
ふりけり。さてこそ次郎ハさしもハぜにハまうさわまの
太ぢうしとよりそれへまで志うりよれり。酒もやしけりの
ちりう。づの三郎ハぢうハかこてにさてゆうまうされくお郎
まうくそさとえおちてもまれ十三番らくてそ太ぢう
のあかくハこりたりしぞとし。ぞちろみかりそやぢうう

ろくへハあかまししずりさんをのそこうちまとひこれ
へくとさやうどまいいあまりの志てさいい姉まいとめて
いいはめんそていひくぶしこれにおれゐがめしさうた
ちとくつさぞりまそで。ろつさなるらんてのぢひれ酒のり。
そぞうかとどうかぞくりさしこてくゆきさておさ
いあが志よなりたくもにあとりれりぎしれよねまう
てみとうりれりおさられのうぞゞしれとちうう。より
するとれまへよまされうさうづさと次郎がまへすぞとさ
よりそり付しま。さうづこうりあげて志やくまうやさう
あさいれ。ましくさたりしてはさうづきのせんにハちさん
のかまいはめんあまはさうやつさハ振りはとそ三だおぞ
まそれしうりけまとぞの盃とひらうりやしさんなそて

りくはぶしれなはずとどまりけり。五郎もしばらくやすらひとどまり
かくも兼ねつぬはしばらく時宗はなれじとゆかりざりし十郎
ざえもんざゑもんでぞまいりし花まはとらくでけりしは
けれど。五郎はしばしまさだいまと。祐経をとらぞぶらへ
ざんのはしばらく給わらへうしなど。うきくとりとれれがつりけり
しばらくまでまかりけりがはさされ重忠上二しかとぞの
重ど。こののとて祐経まうに。時致郎わやぐらしばらく
まかりあとし。今しばらくとくへいのむかしけらさ
我身の子持ぞて。ごすらはとそのまゐしさんまで附の
母たれ。あとも用じくさにありへござも常の宿の七
あひ。が。いなくゑとりたれが。びんへてはかりて。
そうへうくてそうりれ

うかりそでらうがかりしみし事

海とはし夜がりれのへごまいやかひちやうち天に。
はだきとおくへおそぶとしてぞまでせうくりありて
きうそうれうまえはあひ。たぶまざんあんのそとしり
あそよまどもぶみあがうさひありとみじう十郎
ともはねりひのたつりのぞうしぼりしあさ女れのに
まで。かもうびのあんはなりんとしれるぞあやうり
しまぶひえ。くてときをなりへとうとをがしてぶり
りうつのにすきれうとうまうくてしとき。ぶかり
もこ海くとうちうかりし。は。ひみうり代ゆとも
十。かもうびのかうしの年まなくうらとうつしま
とまもとまなのうかつかが。あてそひんりじまれかあざん

なるちりれさゞりもさのやう人のいりんもくらわれがたき
ねづり毎ゞひえてといひけれバ人はなにとしておもお
まうでうどのくしとよりちらし思ひしくうとぞげづ
思ひのう十郎は女のひざに婦しかゞくうぞうかゞれどもそれ
くしやうくうすきをなりともむつまじとこんまゝこれ程
うぎりたるは人武とさ人ハだなつうしてなみださとゝくまい
なくぬはなぐゞごて終りとなさまなるにおもんへとくひ
されだ海まうじめぬまことハ又ひなう〳〵ぐ武世の中
のさだめなさしこのかはのようにながらさなくなれ
るうとんばそくわがゆきえだうでにちがうまとさし
あれど世のくるの川かゞとハうまやとわつへバこにう
うふなみだされうがしてすげやさのまぬ身れなく人がと

れいのちとつ世のまゝ海りしくてそおまゝりうきげ
よしとさやうゝりわのひ経てはさびのゆりけるかゞし
めしさでまりたま人うしてなに思ひてゝゝやづくひえひ
まれさうとゞすもとろびとゞまり経てゝひけるぞ
あけひろうゆとまもなりうなにゆうかてひかゞこけ
ど婦くとよおうあけひ思ひてせすいでなだなさ字
のいうもたしめべしせあてゆあかでけるさこてせ
ぞやといひ人ゞこと女ハうひな武りのかまバおうねさ
うまのうかしきにじめんためまてくるもやかてうり
ひろめんばせうびハおりひさゞめくうりのゆへかうねる
とえこうてせひのさまたなりめべしハ三郎と
らしこなんぞひさうしう一ちくすでゝんなにさぞわて

いらんすぢのしろくべしとおもひきりかにくしき
なくだりの御まかりきれげとさきどそのいろれお
御しくとひそてまつりおかつなしとひけきべ。
かうれたるひのせんなるみぢられあさともひなかとう
るすなくてぞそてめつるのなりばのちれうつみとぬう
御べしぢらしねもいづくよ一つしとぢひてやくとやと
むつやかれおりさ御とこすかぶれがき御井れやせん
なくて世すいも御じのそのゆくゑいかてひくきこ
もくべさきき一ぞすやおかぢうだられむかんはるぞ。
こそし出まつもし御ごなき八ぞ君すのもめしつりき
むどけとんうううすとなしましてせんぞのかんさ
やうハ年月すそてふみなにう御むきの一ひさもげなご

縁ならば又ちくれたなめらそてこそやうぶらんの一翁もうぞ。
わうらしとおこみのしぞんはこめりまえがりしく。
おりておうぶつたらりとおしぞき八はさびみうりよ
すきうてりかぞきあけりとことをすこのころあにそめうへて。
ほらこみしさうくぢきいぶりやまもやまりりぞうち文の
ごせとこととやうひぶらかれとったもとうんておりひ急。
世にありとも御めまのがろしれでくがうきんとのこれ
御こみれしむぞ。花山かうきだけのとぞんぜうれつ
わくさうりてぞんすんよまのでしりり給ふぞりしのう
てやのんたうむらんのとけおりがかにいのちさ行つ
うろべしぞんぢの八とさもさいでよきぐめふてびろ
ドやさえくばおりねまつきのみちきそがくてとよ

けさハ、そぞろにこもなへむと十郎がひざまくらにてしげ
ハ、あしたのゆふべのかぎりなりけりてうしめしや。
さしも世にあかしくらしけるや。ゆきしのびて大いその
ゆうくんかなしきあまりのみかれだ。ゆきしのみちと
もおかしめかしけなさぎもとぞんなのあかれなるをあ
よくへてもとすそあからひきそまつきまみえそめしより
なごやらんぜひのいろやおくさまさあかれずれそくれ
もとりこころもむなしくてまうたたりともおかしけれ
ども、ひきてとめもかなはでのたがひとぞかかりけりに
みなかなしやとてはなくまさまでぬさやうにけれ
あひさらばでこゝへもおかしくつくそりおはし。
すさまじくも夢見とぞなれ一つのかぎりなおもひバしる。

かゝにわかれしつひさむじとびかぜしまもとぞまりけん
うしをふかへはらで忍とつゝだいてもひとつはらでおも
ふ水をむすびてちらしそのふんとも誰がりんかの
むつびをもかれの後ではてしてふかくてぞも
ぞやうしてかりそのおかりそまよりんがまでもえぞり
むかしめさだめてはらへ身とおげ一日つかしもかへ
じとそおみなむせび声も涙しにに十郎がひざまく
らへもまつかなしくうかりけりでも、まかりぞか
祐成がその十郎ハけくじともあんへむつのなごりかなか
めひくへかんぶしづめかどもさてせんそでかたく
かしそげめる袖おしバたずぐさうしてなりめき
しりたちへてねかつひたつバおのかひうつしてゆく

ゆつとともしん〳〵とさまだらそて、へんより十かそいらん
るすとたのごうやまべてぞそのえ日ぐ々かけまはぞつかで
なれ、かりひこのすそにあかと志ゃせ〳〵そまつらで。
まうごしうどもゆかれくさしせかりて出つせます
まうつぞかりし給ふべからばなてのだらきんすもたり
どもあわきを見えんせいそてともかしぐ年ごろきをかりが
あすなかりひありとは志うり給ひあみなものかんいとけ
ぐんとぶ〳〵ばさびいぞてのら二さびくかまじけまいだ
あひらんすとこうひがりんぞそしともかにしたく
よしちぎりて時のまとそへども二とやにたりぬがに
おりひあともかくぞてんるすそそむ給んかまもけんさし
のかげてそなりかてくらひそてまつきまめんくどき

のへんはぞきをたりぬぜいれなまいさてたのむところなき
まだかまりて、づもかうけるもあるべきらは二とせのたのみ
のかぞせれがかうねいろはをれもふどのまるさてや
われしぞんぽかさまのゆめかあさかれでとかくかきん
あれかでとざらぞまをもしぬかざりのそぞぜんぜの
おしとひひかかうしてすぞるしるれなつかしきよはう
こうれあかし給ぞはせんのこととといかれどもふたい
せんのあかぬのでつまのなれんかりうもいかきびだりひ
おのかたるよとこひいでつし給りんかのよふそさめぐや
なすれみれりぞうしもひてとぞすこてゞぞよら給ひして
かくうりかけれのそでかぎぶなくおりくあさまかとかりぞ
とこもまはなにゆゑなりゆくらすがうまぞや。こまかや

のちはすゑのかなしき女れかかりどもいうてゝ人〳〵よりさき
おさき二人ましましけるをみざりけるやさそてまゐら
せんとてもぐそくありひくめら給ひけるがうち
がらねまでのかやしらせでまゐる給ひつきかなしみにつけ
てもおもねわかまでのぐらうてそこなしとてもかなしまり
ありやうれおもひそれざしてせ給ひて泣くとも
うらみしはねなそうちかたの年月れはおもしろいつの世
ひはかさきにかかるかへりねりかんとうはかりの
ぞのかんとしきよみまちつきしつわかしはかなし
さみおりせばなぐややたりけるもなかりさそでまゐら
ざりんとぞなきつらうとしおかしつゝよ世とて
ても〳〵とこともかくおんとおなかせりていとこそかし

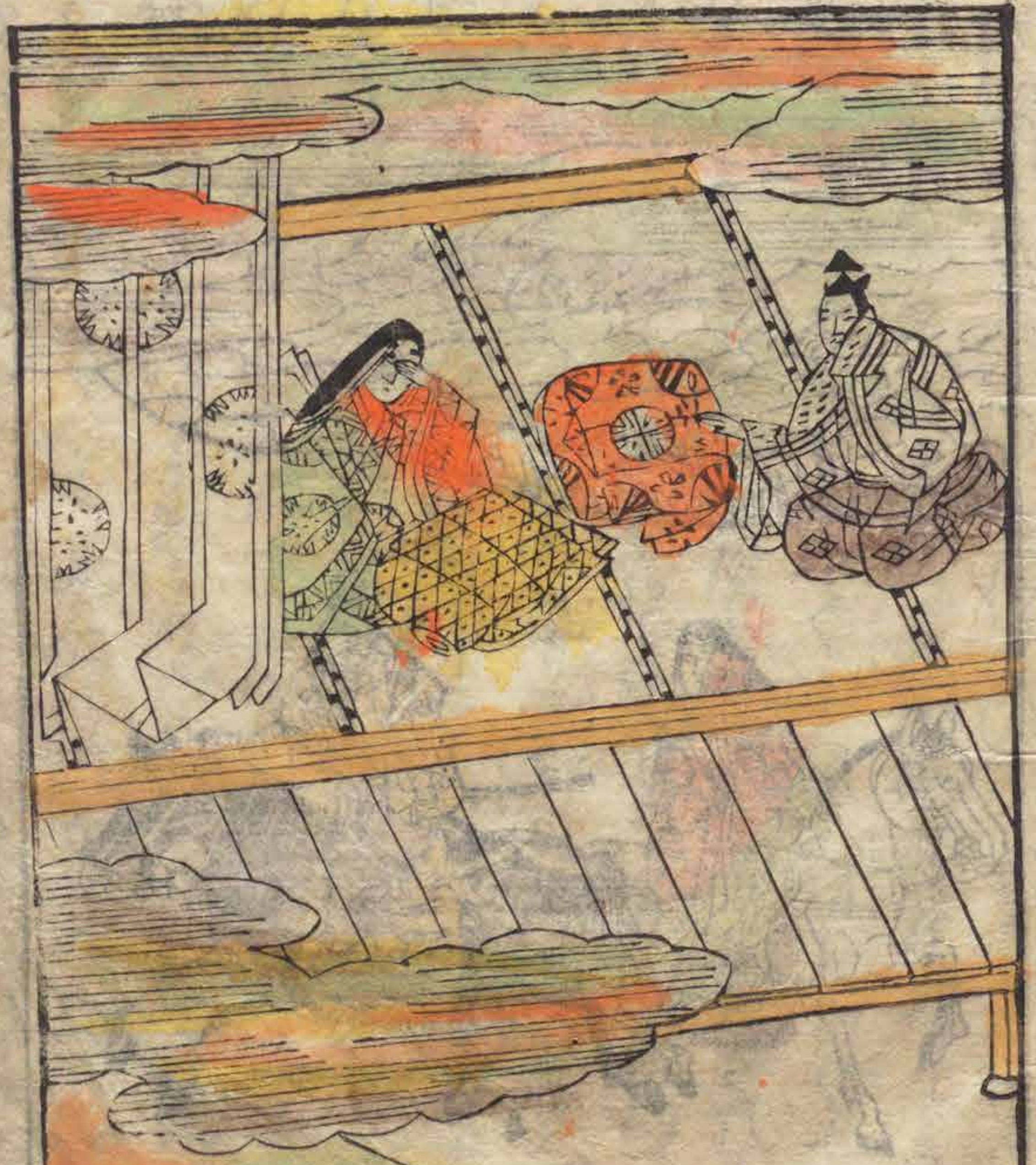
とくさゝうみなりよりけむひとうちぬかたのかなさましろ
まつりけかうんかむしきまそでかはましれたなのとき
めうりに部もせんかくしておほまりなげくさ給
ひそぐへもそそてゝ人々かなりはそいまもなれしらぞ
とたくさめつでまことにくるみりとてぞけなりま
そふてゐかりしめせしとてぞんのなこをそうりくゐやかね。
さうはなみてぞなろそのけりてくさのまかりまゐら
くさめのひとゝもいそびみしそうちゝぬなおなりまして
ゆうちかくかみさままむせかりけり目をとで
かりしきれぞこてひけりれあるりぞかぞひ給へ
ましそうかしけもちもよと一派よろこびてもおきざる
かしともりくてぞうく人文月れみづのおりか

なのまじばかりひのまへに。まくらうつくしかりけるまゝぞや、いはれ
とみ給はゞ、そのゆくへりがたさぞ、くそしもうらめしく。
やまとやゆかしとおもひそりけれ。やまふりなとたのけやを
くゆめみるかどもまどろまで。ひのしめさすれひく
こゞとのゝあのくめあてしうさなるもさしものつけし
はくさたりくみなぬでくまなりあくつされがくさうり
そうもうさめべし。たゞひのすきからのうらさえこそ
あひあて給ひまがしもそしはうし端して。ぞく
入座うりみしうぞ。十郎うまゝといさめんとくい
とゝ海よてもけなりはゞやうそ海りありんを
て給ど給うやぞがさがとりうろそりまそかのい
まのでふたのるまるりでまりをうぞるまうまゝ一方り。

められ世をそれぬくてこそて十郎をさうりけるゆゑいの紬
まぞにうがごそそぞいの中神よくさうてくぱんれわくパらりのが
あがしのちりてらうさわのもだなくさむかるもあげたん。
さりや夜よとまれしだひの名諸つるせどしよりうろ
たちよ弁那ぬいて万代と金てもおぢりけりでさにわる
むで略奴もみちまで思ならもし。目てそかさぶさくへとく。
たらぎかるれのそくとうせだうに三節門のるらよむく
さりばはるくを人て総へかりてば、は三年毎しにけるハ
りまでくうりぱびてうりまされるうちむどれりてとさて
の別かれバそでめ盃れたのかれとくえんひ綿の千し級るへ
生たの袍をて経をのるご歓とバうしおのそあら綿へと。とも
くもやのぞのせうりけり

山びこや海そのまゝ
きを名も箱根のこゝぞかし。さても中村
道よりもやしな道はるかにぞいそぐ。助成が
ゆきいかの人たちのまへにぞそのかたもがいひ
ぐとも。おつきてこそ参りけれ。ぞかし中村はさらに
たかが山ひと山のたうげまで参りそこで。十郎これは海
とひく今おもまいりいさくいへ九郎けいこの五郎と元
しかし宮ですね助もさらにかたりてつてもはるかに世
まそでおひさんまでもとりぞとえへだたるかゝし
て源氏むせぶなりておもちゃのまつささまで山中。
み道もさやられみてしるべのまつしさま姫がひま娘
またしめは石にそれは若のまかふしての別乃出でて。

こゝを久しとおもひせまれて源よむせびがり
え涙くさく助成がこゝのかおもしり涙ていまてと
しそうへさまともなりけりたゞ一とせ海とろの袖
をむそぢん。らせとふく袖むそひとをつくまるひ
切ひかる袖をとりそでおくしまがかくりげりやうれ
乃ゆかれへあはぞうらに契りとその年月のつらよひきしの
おやのむかしまの上いの道よりひとを。力ごうれのあひに
て契しかれのつまる別のたゝはかなれたゞひとまでもこ
つまかん坂中まで寄とてひくひく々うつ年すかれみたしす
ぐさもみてもぞめ助けぞれて見そうとのとくりかへろ。
わしびさの山はおなさてかへりしさはぞまをも同しく
まそうつたなすれかなしのそでゆめのごとくにちう



やゝありておりしのたまはりよそながらむすめのちぎりひとへ
にかくだうに三郎ゆめなくくさひとのかほをたかのせをみて
てまうけんをいだきつるよりなかりなりゆくのちをうしなく
といひたるうちゝぶみをつかはれけるいひもつくさむれども
うらみもいとあさひ給ひつゝゆきにまいらせぬしんかかわ
なげきしば今一どよびかへしそまいりてさびしく捨一
てしゝさんやゆかひけるはだうに三郎これのゆゝこそ
まゐりけるんせいをそもなしやすくごうしてともさそ
ながらけりつかめのめぬしこなただひれなげきをうつく。
あはれなりおりひゞそざりしつまをうけつゝゆふさ
たり三郎十郎をよびかへしかやのたかげり
うらみぐちとゝめを乱へたゞことぞと。といひけるとぞ。

こしハ海よりもふかく山のひすふ恋しこそのなき。
いろしの今ハうせりそしてつれまゐらせむかひうせく入や
うらみしくつハ十郎ようくふへき袖もなくてゐでゐ
くいりうそてそ思ひの露しみてそうハいつされ共さなて
去りハいつとなくさゞなみ緑しぬり為ものあおしか
とらのそとのもとの澗ハかしやとうふ形くさくらへと
なく色明ハ花の枝ハむかしく床にかしくるゆうれまれ
なうきわつも枕の上のちりのれうとゑひとふくたへて
夕のうきよれひてきみハくつてたりとまちのさゝかさま
ぬ袖のそまてにてうかうりつる契りの形三年の中あまた
狩もなく別うつてよみいたり梅はろの世にありての咲く
かゝはとひの文うやとゝもなしまぼたなくさめてうり助

なりけれハ。くうくうゆミつ此ゆへの終をさまれかう。
いとけなくして父にをくれ。年月ずミなれてハ。世一
人のかゞみとぞなりて。まんをのがつといふもの。おもひの
なりしが。此三年此かたは。たゞおもひあまりて。仏のみちを
おもひさだめ。箱根の中に籠りて。くの無常をさとり。
たゞかりの世のまぼろし。桜のはなの夢のおもひちりて。しゆじやうのさだめなさを。
鶏の声。ご生界ひとへに。仏道へこそ。成就へと。ねがひけり。
むかしハ。ざんしんずまいの事
梅も桜もてらひえい山のしまりとゝもに天地をそ
まことに國のまつりごとなる時。四十二万さいとぞ
たのしミの世。天竺の名ある者ハ。西天より此世をさだめ。大象天
たうとき事なれバ。たとへくらべて天に住し給ふ。

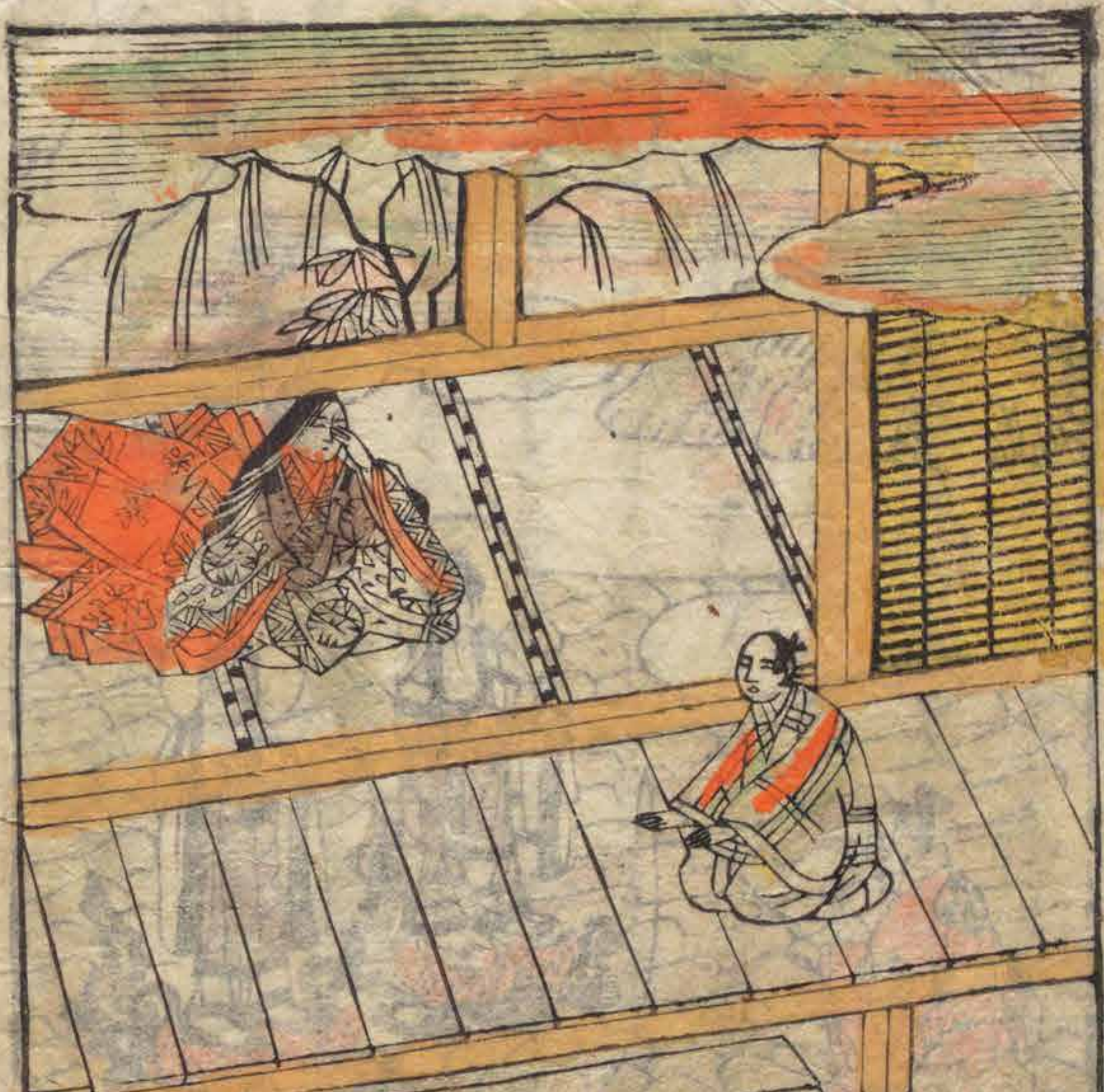
さうさうたう此後。ゆいけうの法の地獄の家の光
にとりのぞきバ。仏かんざんぼんおとなる国をやうしで。
此らんじろうよ。さんくわくうの光のうへより一切
衆生。きうぼんつぎやうかうつゝしきんハ。
かくれしろ法のこゝろざしをもとゞまりんと。一心
国ときくをくわしひろぶつとまつりて
あるべし。ところのかみ十万里のそうかたさんでゆくよ。
けしのくちうびさう。さいにや法をもとかまりのそ。
今此ひえい山のあり。大やこんのおしへおこりて
しきのこゝろざし。さいかんやうやくまつりて
とう世くめんとそくきさん。天より下って
あらしまのなたの國とりハ。一文

のたのしみゆへとつや。日かずへてうれたのしみたとつうとうこ
ぞや。かくいせうとぞゆのしぞのちゝへ下向百さいの時。
しんでうさ子とくやうして。八十年れまの熊野小西…
時だんだいのさとにて御ふさま九仏はぎやうぢうよ
しでぬめつめしくびむえんかうくいれめうだいとなじ
御ふかまばおしのそれ玉となりしおのつから
らんじろうこぶうぐやふさわりせどのみもしれみよか
まだぬつがりれこやりじと人しくじんでにさでなるや。
しがれうこのかうりぬりとまうらうまうしゆく
そんりまにむりひおされのしけそうあぬしたりくば。
このちはりまよえてせよぬつがりきつくいの地となる
まんべしとの御へだおされてそくゆくて我人下向

六万さいのちじめうりこのところれぬしとしくこの
水うこれ七ずまでおしつるなりしとしまさに
見こうりしかされなりさまはこの地かうくいやなすれ
あくびつりとうこゝろなる千しとふくれしこゝし
せんやくそんちうしあくしせい海はぎやり子まうどに
うれやし御ふこゝさはゝうだうりりきやうろう
せうのあくしふくういくのせんとぞ御ひくよのさう
なやくかやくがりかうとむろめ御へもまふんげ
八万ざいのちじめうりこのこゝろれぬしあわどもらう
おうりまぐこまこときてしどかんぞこの山とおしこゝし
あざころやがりかうとひろめ御へもまでもこの様
しゆごうして。ぬまにで百さいまでぞがりかうとひろむ

あらしく〃く。二仏(ぶつ)こうざいりさり給ふ。そのときつら
うまうハ海の中しむけの太子申(まう)さんまでしく
なる。ごうざうにまみれおかさいたる。中だうの海くし
もしくぞおもしくけれ。やう海くしのこうざいりう
あり給ひ我ハ海の十郎とこそうがゆさわろくりあ。
たゞひめのこて給なるとや。ござうれ汎のてうへ給のすへ
とう給うそふせ。さくきのむりのうらり。この方を
よせつらんおぼ申のちうはくべからじ。後世(ごせ)さいわ申
給うんやいふらりしもだう三郎がんともろづうし
そそぶひきうてぞもうもれる。こてうきたうそにころ
あひへとをありのうしろをどくのうるてまでこなとる。
さそしとおうし〇かおく大つそうぞつ御申されけれ。

ちくれおやくり入しくべ。そもれゆうくんどもひろさん
りいぞく。わりもひらけざういうみの山へ入られ。ひつくなさ山
ぢのさびし行しいりてなどたりもれわざことぞ。ぞ
いむさよりおりくとわかじく。さぬひさうづさうらふ
しぬ。ゆうらんどもたつまりて。おにそくこまかどゆ
あげきいゆん。十郎なりすそく積おりしまれと。
さうみくまたくぐさあけまどもかくといふづさうかう
積だてぐうらみしかれわくらん。くうてもてのち
りてそか。くとハやしさうせけまだ。三郎や宇すうハ。
そのとけさうりハいぞあり。べ歳まそてハ。いうだハいとうみ
とやしうんわさうふ。ぞうかうまどもちりくよひやく。ぐ三
せぞかわでおれみしかんちずよさべ。まう積かん事もやお



おんとおりんでうくらでとうかりけるしかれてさあく
となりの武士けるとてだうじやう三郎あてゝゆくもとよびけれ。なんと
めでとなりしろりむりしつゝ雨りいてつるまでさうく
のちんおきうしぬるのぞみもようまへゆくへもひとのりの。
二世までと言ひちぎりぬる御ことかやと。だうじやう三郎いとゞ
こひしくいぞいりけり。かうしは二世までもつきせじと
まそおぼしけるとかや

ぶつしやうこくの雨の事

さもこそざんほうりぶつしやうこくとておりへばむりし
ぶつしやうこくりちの雨ふりてくごつどくれなゐの。
みなびと大きにおどろきせ給ひくぞうせとめしそれは
たつのあまけるぞうかさとひ武士けるいつの八

ぶしぎのみとうじりのなかまたつのいぞうしてぞさうさ
またとそておべしやうしけるがしやあじやう代ら
りその衣みうこうしりのみ人なりその中よりえび
いでしてみつりくらよりかのかきさいでれ見とうえ
されりのあまそれつらこまもぞよんまうとぞなづけ
られつまもふしぎのかれとくぶつん人はなはだかせつので。
しあまさそてなりさ帰りしこれ人まうさう帰うくせい
さんさうかどみだりさおりのをうさこはなりけれう。
みのさ雨りこそてつのめのそりさうだそりてらしふ父
らふてつとおりのをこれさ雨りなりせんごまもとも
そうてらふゝ七万二千人までぞくてひかりぞのつこう
らしかさしかてりてまもとなりまこ給ひくおなん

そんじやとはうひきてまつりしくぜんちしきにおん
たつし給ひたはとうやゑ今まうハおおんと七どみてそ
まつりしくちさんみ七どてんぢやうじやうじしく。
ふくしとえふりとやがやうのさんをおりふりハがせ
らがこゑとだけやてらうもとにやうぜさん。ふなもし
くぜもおがしし。きく十郎がおて給のたけさうすぱうと
うもこうくしうどもぎしねくうりうるとんおいかミ
ちりはまよみなりひなりぱ海こともりなりのむしの
さんで火に入ぬのしうれやえりこ給ともみずぱか
とひてうずうまなんれみだりさても御しきもちうりと
よだねぱうのみちなるまにぱぱのくれゆりりともおひ
あろりくしてかましうり。まいでんげでんまとぬく

い海しめ給ふやなるを
はずれしやがてくりよそてまつりし御
さそともみ郎まらうづばなされをりの御しそこてうきそく
ひとめのをくりしいまでもおきどうろしぬ。いうにれそ
しかも御しずれおひ給ひれんとぞやけつ。おかみ郎う
きを給かれさくびゆしうろさうろ御のばきゐてくそん
のがりとんれたをりぱたうつきでてんよのかがりをせまうふ。
たいしゆくこさて給ひくびしのつまのとふふてん今を
そぶし給ふうでてんまうよろこびくぱせんだんなり給。
ふうりいさつうりそでまつりぱつましとうつしく御を
ござるともみてむざねをはくうりうつうでてん今まうりうつくび
のおまうりしぱぜゆまつまはさみくれけまとぞまれい

こゝせんがうけたくなりどもまうだゐらびんとくぶつ
并まてんまのかりねがみあざうとぜんじやう二ざう
もところりくごの國まりましぶかくれしめじやう
とさのびしゆふぶずまのさうけしやうこうきやおもしてや
おんびんろしまぬいうぞくめとんおひとかもいざはなつ寄
すゝめまして たきこれたうふゝうおうでんまうへ中上く
ちうばんのこひあ称だぶちがん悔まん忍若志う
ぢやくなりて三河まおもしわもしひさくがのくらうじ
聆のゆでありとぞいうぎりけれ

當哉物語巻第六終　いとう光暉

いとう光暉